

福 井 県 医 師 会

だより

第574号 平成21年(2009)4月



天女、玉もち還る

福井市 村田 秀秋

表紙写真説明：天女、玉もち還る

福井市 村田 秀秋

イメージ画です。

家にあった掛け軸をヒントに、色々なイメージを重ね合わせました。

天女は片町の美女を、下の建物は東別院を、木は満開の桜、松等を参考にしました。

この絵の意味するところは…「私共の肉体は全て天(宇宙)からの借りものであり、用が済めばお返しせねばなるまい」…ということである。

醫 縫 録

夢

三方郡医師会長 関根健史



大病院を辞め福井に戻ってきて16年、独立してから8年もたってしまった。その間自分なりに、地域医療へ貢献してきたつもりである。私の住んでいる地区はまだ交通の便が悪く、車の運転が出来ない高齢者にとってはへき地と同じ条件と言ってもよい地域である。そんな中で開業するにあたり、大きな町の専門医へ自由に受診できない高齢者のために何科に問わず、また重い病気でないと頑張ってきた。そんな事をしているうちに、「私の命を先生に預ける。最後に看取ってほしい。」とか「先生に手をとってもらって自宅で死ねれば本望」と言う声が増えてきた。「わかったよ、頑張ろう」と返事はするが、しかし内心本当にその人たちの最期を自宅で迎えさせてあげる事が出来るだろうかと不安でいっぱいになる。いままでも何人かは望みどおり自宅で最期を看取ることができたが、やはり大半はいざとなると家族が病院へ入院させてしまった。最後まで自宅で家族と暮らしたいと願う高齢者は多いと思うが、そんな彼らの望みをかなえてあげるには一般診療所単独では色々問題が多く、最もネックになる家族の介護負担を少しでも緩和するために、介護スタッフ・保健スタッフとの三位一体となったシステムをつくり上げなければ、なかなか成功しないように思う。介護保険が発足したことで、確かに介護サービスが充実し、訪問看護も行き渡ってはきた。だが残念ながら私の住む地域ではまだ三位一体の体制が取れておらず、一つの診療所として人材不足と時間の無さに悩まされながら悪戦苦闘する日々が続いている。

また昨年から郡の医師会長を任命され、人前に出ることが多くなり、診療以外の慣れない仕事が続いて押し寄せてきて、ますますストレスが溜まる日々が続いている。

このような日常の合間を縫って、携帯電話のベルが鳴り響かないことを祈りながら、私は車を走らせる。南風の吹く海の向こうに蒼島や青戸大橋を見ながらいつもの道をマリナーナに向かって。そう私の趣味はヨット。始めてかれこれ20年近くになってしまった。大学から帰ってきてやっと海の近くに住むことができるようになり、夢だったヨットを小浜湾の内海に進水させた。船齢20年以上たった23フィートのおんぼろヨットだったが、ディンキーとは違い、ちゃんとキャビンのある僕にとっては立派なクルーザーだった。そのころは毎週海に通いトイレを直したり、ギャレー(キッチン)を作ったり、テーブルをつけたりと、夢中で修理し最初のヨット(Daisy I)が小浜湾を走った。日曜の早朝二日酔いの頭を抱え、岸からテンドーを漕ぎだし、沖に係留してあるヨットに乗り込み、メインセール・ジブセールをセット、静まりかえった内海を9馬力の船外機を暖機しながら静かに出港、双見崎を回ったところから風を受けクロズホールドで若狭湾

に乗り出す。波の高い日も日本海特有のピッチの短いうねりをサーフィンさせ走り回っていたことを思い出す。昔は若かったのか怖いもの知らずだった。海が荒れスターン(船尾)から波に引きずり込まれそうになったこともあった。でもそんな日々がとてもしかった。仕事に追われる空間から、誰もいない世界に自分を置くことで心が癒された。その後、琵琶湖に船を移しヨットレースにはまり、チームDAISYを結成して楽しんだが、やはり海の魅力が忘れられず、2年前にまた若狭湾に戻ってきた。休日は気の合う仲間を集め、クルージングを楽しんだり、風のない日はマリナーナの仲間に釣りを教えてもらったり、夏はシュノーケリングをしたりと、海には遊びが絶えない。時間ができれば夜明け前にヨットを出し、南西のモンスーンを受け赤礁崎・鋸崎・松ヶ崎を横切り左手に大飯発電所を見ながら、進路を280度経ヶ岬に向ける。伊根まで約30マイル、日の出に照らされたオレンジ色の海面は次第にスカイブルーに輝き出す。文句を言わないもっとも忠実なクルーであるオートパイロットに舵をまかせると、いつの間にかデッキに銀色に光る円筒形のカンが並べられ、まずはこれからのクルージングに乾杯が始まる。後は目的地に着くまでのんびりとした時間が続く。沖合5マイルも離れれば、そこは風の音と波の音が聞こえるだけ。沖縄と見間違えるようなマリンブルーの世界が広がり、別世界の中に吸い込まれ、日頃のストレスが癒されていく。目的地に着くと早速宴会の準備だ。どうしても、海には酒が付き物になっているというか、よく似合う。何故かヨットマンには酒好きの男が多い。これまで飲んできた数十年に及ぶ何千杯もの酒代は、それこそヨット一艇分に匹敵するかもしれない。酒飲みの自己弁護士が宣わく…「酒を飲めない人は人生の半分を損している」という言葉の通り、どれだけ酒に助けられ、勇気づけられ、人生を楽しみ、豊かに、バラ色にしてくれたことか。ましてやヨット好きが高じ、デッキやキャビンで飲む酒がどれだけ美味しいことかを知っているヨットマンは、なんと贅沢なことか。私にとっては何にも代えられぬ大事な時間になっている。今はまだ地域医療を護るためにロングクルージングには出られないが、何時かは随分へ、いや沖縄へ、いやいや日本一周へ旅立つ事を夢見ながら、船が出せない天気の日でもマリナーナに出かけ、愛艇の整備をし、海図の上で疑似クルージングに没り、間寛平さんのように大海原へセールを上げる日を夢みつつ、地域医療にこつこつ励む日々を送っている。